一人称なし

真木　美穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一人称なし

【Ｎコード】
Ｎ６１９１Ｒ

【作者名】
真木　美穂

【あらすじ】
暗闇の中から誰かが言った。僕が生きる世界は君たちの世界と違い何が起こってもおかしくない。
ジョウシキ　ヲ　ステタモノ　ダケガ　イキラレル　セカイ　キミハ　ドウ？
その声の主は、天使か悪魔か、それとも道化か
まるで足掻く仔羊を嘲り笑うように・・・・・

？（前書き）

初めての小説を書きました。拙い文章力だとは思いますが温かい目で見守っていただけたら嬉しい限りです。

?

暗闇の中から誰かが言った。

僕が生きる世界は君たちの世界と違い何が起こってもおかしくない

ジョウシキ　ヲ　ステタモノ　ダケガ　イキラレル　セカイ　キミハ　ドウ？

暗闇から目が覚めた世界はいつものベットと天井ではなく、草と空だった。

しかし、テレビで見る青空とは違い、太陽が笑っていることが直視できるのだ。

ざくっ

動くたびにまるで氷の上を動くような音がなるが、視覚で確認できるのは草がカーペットのように当たり一面を敷き詰めていた。

このまま何もしないのも良いのだが、なぜか動かないといけない気がした。

何か手がかりを掴むために立った。世界自然遺産に登録されていそうなほどに美しいカーペットを見渡しているとポツンと一つ淡いピンク色があった。近づくとどうやらウサギのぬいぐるみがあった。

ウサギは可愛いとは思うが何とも間の抜けた顔だ。

何か手がかりかもしれないと思い、抱き上げた途端に映像が流れた。

―なぁ・・・・。誕生祝いだ。お・お前の・・・す・好きなうさ・ちゃんだ・ぞ・・・・・・・・

画像も声も途切れ途切れで映画なら見れたものではない。

話しかけてきたのは父親か親戚のおじさんか、お兄さんではなさそ

うだ、包み込むような温かい安心できる気がした。視点と話しかけられ方からするに子供、幼稚園ぐらいだと思われる。

ふと我に返るとウサギのぬいぐるみを落としてしまった、拾うためにしゃがむと、ぬいぐるみは自らの後ろ足で立ち、話だした。

「酷いことするなぁ。ふぅ折角、洗濯されて間もないのにぃ。」

「ごめんなさい。」

「ん？」

ウサギは嬉しそうに間の抜けたつぶらな目で見てきた。

「久しぶりのお客様かぁ、アンネ様も喜ぶぞぉ。プククク」

「アンネ様？」

ウサギはとても驚いている、顔は相変わらず間が抜けている代わりに体中で表現をしている。

「ど、どうして創造主のことを！！！しまったぁ」

うん、隠し事などできない性格らしい。

「うっきー！！！とにかく急いで帰らなきゃ！！！」

ウサギはサルと同じ鳴き声なのか？ただ顔と違いウサギらしく走るのは速かった。

「待って！聞きたいことがあるの！」

追いかけながら考えた“ウサギの主＝創造主＝アンネ”今いちピンとこない。

相変わらずウサギは早かった。よく考えるとあんな愛らしい短足、いや体なのに追いつけない。

あれから、どのくらい走ったのだろう、笑う太陽は動いた形跡はないようにも見えるし、疲れを感じないということは、まだそんなに走っていないのだろうか。

軽い坂を走っているようだ、頂上に立つと丘になっているようで見

晴らしが良いのだが、困ったことにウサギがいない。ほかに変わったことは、湖が見えたことだ。
仕方がないので湖に行くことにした。湖というよりは海のように果てしなく広く青い。
普通のように思えたが、やはり違った。それはすぐに分かった。だからと言って湖の水が変なのではない、手を入れれば冷たく優しく受け入れ、掬い上げれば、行き場のない水たちは隙間を見つけて流れ出る。つまり水という物体としては何の問題はない。
見上げれば太陽は笑い空は晴れ渡っている、右は湖、左はカーペットが広がっていて、何もない。しかし、湖に移るのは、暗闇に誘うように木は生い茂り誘うかのように月は不気味に笑う。
ウサギは見失ってしまうし、周りにあるのは動くと雪を踏むような音がなる草むらと怪しい湖・・・・・・・
どう考えても頭で理解できないことが起こっていることは明確、ということは夢なのか？

「ジョウシキ　ヲ　ステタモノ　ダケガ　イキラレル」

不意につぶやいた。どこで聞いたのか、わからない。

もしかしたら、この湖の向こうの世界に行けるのではないか？いや、きっとそうだよ。
「ってなわけで、考えるのやめて！飛び込むとすっか！！」
冷たくゆっくりと落ちていく、水面から離れていく。一秒経ったのか一時間経ったのか分からない、冷たすぎて麻痺をしているのか、息が出来ないから苦しいからか考えることもままならないまま、溜め込んだ体内の空気を吐き出した。きっと随分、沈んだんだ見上げても光が見えない。死ぬのか、それもわからない、もしかしたら、もう死んでいたのかもしれない。

?（前書き）

何人かの人が読んで下さっているようでうれしい限りです。
?よりは短いですが気にしない（笑）

?

目を開けた世界は、青碧蒼、様々な青が周りを染め上げている、水の中だろうか、違う普通に息ができる。どちらが上か下かも分からない。

足元から手のひらサイズの球体が一つ上がってきた。手で触れると分裂してしまった。そしてさらに上昇していった。まるで気泡のように。下から様々な形の球体が上昇してきた。その中の一つバスケットボールくらいの大きさの球体が体を通り抜けた。と同時に悪寒と痛みが体を襲った。痛み自体は針がチクッと刺さる程度なため放っておいてもいいのだが、真夏の肝試し大会の背筋が凍りそうな悪寒に近い。もしくは、母親に怒られることを自覚してしまった時の感じにも似ているかもしれない。逃げ出したくなった。

手足を動かして球体を避ける努力をした。コツを掴むと楽に動けた。息継ぎを考えなくて済む分、潜水よりも楽に感じた。球体から離れ周りを見渡すと、青い景色と謎の球体以外何もない。上に行くことも考えたが、上空は見えない下の方がまだ何か手がかりがあると思い、球体を避けながら沈んでいった。

周りは原色から藍色へと景色を変えていった。下へ行くほど球体は大きくなっていった。

いきなり大量の球体が湧き出てきた。すぐに悟った。

「避けきれない！」

体中に球体は突き抜け、痛みが走る。重なる痛みは針では留まらず激痛が走る、逃げたかったが逃げたくなかった、ここで逃げたら二度と変えられない気がした。あまりの痛みのせいか意識が飛びそうになる、何かが頭の流れる。

濁った水の中？光が見える・・・・・現実の世界？周りは瓦礫が流れている、あれは家か？体中が痛い、手足が動かない、やっとの思

いで視線を下に向けると腹に瓦礫が刺さっている、そこから朱い紅い糸のように濁った水と混じりあっている、よく見ると体中傷だらけだ。死んでいる？信じられず叫んだ。

目を開けるとそこは薄暗く青い世界、さっきと違うことは球体ははるか上に上昇していて何もない、そして体が流されている。まるで竜巻のように渦を巻き中心に向かっている。
下を見ると、それは不気味に悪く笑みを浮かべ、顔は丸く黄色く、ところどころに黒い丸がある、そうクレーターのよう！そう満月が吸い込んでいる、足掻いても力負けしてしまう、あがなうことはできない、目を閉じた。

？（後書き）

次はどんな世界に飛び込ませようかしら

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6191r/

一人称なし

2011年10月8日20時55分発行